

使う人が愛着の持てる空間を提案。 学生はやりたいことを存分に楽しんで。

Role Model 1 | Professor Kiwako KAMO



Role Model 1

名古屋工業大学
大学院工学研究科 社会工学専攻
教授

加茂 紀和子

KAMO Kiwako

Profile

1985年	東京工業大学 工学部 卒業
1987年	東京工業大学大学院 博士前期課程修了・修士(工学)
1987年	久米建築事務所(現 久米設計) 設計室
1992年	一級建築士事務所 株式会社セラヴィアソシエイツ 設立
1995年	株式会社みかんぐみ 共同設立
1997年	千葉大学 非常勤講師
2004年	ICSカレッジオブアーツ 講師
2008年	昭和女子大学 非常勤講師
2008年	東京理科大学 非常勤講師
2015年	名古屋工業大学 教授 (クロス・アポイントメント)

建築ユニット「みかんぐみ」では話し合っ形にするのがモットー。

みかんぐみという建築設計事務所での建物の設計監理業務が本業ですが、2年前から名工大に着任し、設計製図や建築計画の授業を担当しています。みかんぐみは意匠設計、計画設計を行なう事務所ですので、構造と設備設計は協力会社へ依頼しています。意匠設計は、デザイン性・空間・景観・設計コンセプトなどを詰めていきますが、どういう空間にするのかという理念

がないと形にはなりません。誰がどう作りたいか、どう使いたい場所なのかを意識して設計しています。みかんぐみを運営する4人のメンバー全員が設計者。皆で意見を交わしてフラットに進めることをモットーとしてきました。建築家の考え方がすぐ主張される建築も当然ありますが、みかんぐみでは社会性、公共性のある空間を皆で意見交換して作る、たとえ小さいプロジェクトでも話し合い

の中で形にしていくということを大切にしています。多様性が求められる時代だからこそ、多様なものを受け入れて空間化していくことが重要だと考えています。共有、共感できる空間であることや、使う人が愛着を持てるというような見えにくい部分を形にしていこうとこそが、みかんぐみの守ってきたものであり私の立場でもあります。

葛藤の中で折り合いをつけることが大切。完成後、喜んでもらえるのが醍醐味。

東京工業大学大学院を修了後、久米建築事務所に5年ほどお世話になり、その後、ライフパートナーでもあるタルディッツと独立して設計事務所をスタートしました。数年後、NHK長野放送会館設計競技に応募するためにメンバーが集まり、設計者として選定されたことで共同主宰というかたちの建築設計事務所「みかんぐみ」を結成しました。「みかんぐみ」というネーミングは、当時保育園児だった私の娘のクラス名からいただきました。かれこれ22年になりますが、基本的

にはこの仕事が好きだからやってこられたと思います。それでも苦労と葛藤の連続でした。最初に絵に描いたものがそのまま形になる訳ではなく、まずはコストという壁、そして当然ながらリスクを回避しなければならないことなど、何かしらの理由でできない事の方が多いのです。例えば安全性が重視される学校の設計では手摺の高さひとつとっても、絶対に落下しないためには檻のようになってしまふところを、どの高さが妥当なのかという協議が必要です。公共の建物でバリ

アフリー化としては合格だけれども、過剰に手摺がついているだけで景観とか美しさが考えられていない空間をみるとどうかと思います。それ以外でも、さまざまな問題解決しながら、最終的には何かしらの折り合いをつけながら、楽しい空間やわくわくするような空間をつくりたいと思えるのは、完成後、そこで子どもが遊んでいる姿を見たり、活用していただいて良かったと言っていただけるのは、形に残る仕事だからです。そこが一番のやりがいです。

地域を巻き込んだ学校の増改築、知恵を集めてすばらしい空間が完成。

今から10年前に、長野県のある小学校の増改築プロジェクトで、ワークショップを通して学校を作った事例がとても印象に残っています。地域も巻き込んで学校について考えたいと行政からの提案でした。運動場を広くしたいとの要望に対して、建て替えのプレハブを建てると狭くなるなどの議論の中で、なんと学校の隣家の方が「自分の家が退くから運動場を広げてください」と、2年目くらいの新築にもかかわらず、申し出てくだ

さったんです。これには驚きました。そこで、プレハブ校舎を建てるお金でその土地家屋を取得して、子どもたちは元の校舎に居ながら新校舎の建設ができるように計画しました。また、学校の先生方とのワーキングを重ね、1年生から6年生まで、すべて同じ教室環境である必要はないという考え方が共有できたことで、子どもたちに必要なそれぞれの学びや遊びの環境を取り入れたフレキシブルな空間を作りました。隣家の建物も取り

壊さず、学童クラブとして取り込みましたので、そこは家庭的な空間で子供たちも安心して遊べるスペースになりました。公共の建物にもかかわらず先生や地域の方が熱心に、まるで自分の家を建てるかのように関わってくれたおかげで、完成した空間も愛着のある学校になっていると思います。みんなで作るみんなの学校というような設計のプロセスを経験しました。

子育てとの両立は体力勝負。女性の感性は建築にも必要だと思う。

私の頃は女性が建築学科に1割もいなかった時代でした。女性だからと言われないうようにしようとは思っていたと思います。一方で、女性ならではの感性やアプローチは建築の世界でもあると考えます。子育てで、人とのつながりも変わって、そういうことも影響しているかもしれません。久米建築事務所に在籍していたときに結婚しましたが、独立

するタイミングで出産したので、1年間は子供を横に置いて仕事をしました。みかんぐみを作るときは、事務所と保育園と実家と自宅と5分圏内にして、保育園にもギリギリの時間までお世話になり、実家にも助けてもらいました。幸い体力はあったので、残業しても徹夜しても平気で、病気にもならなかった。結局一番大事なものは健康だと学生に

は伝えています(笑)。これからはもっと開かれた社会になっていくので、学生にはやりたいことを楽しんでやってほしいと思います。好きなことであれば、辛いことも乗り越えられます。コンペなどもそうですが、結果がダメでもプロセスは無駄じゃないですから。そして先輩や仲間からの刺激を大切にしてほしいです。

